

学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

授業担当者

所属/職名:国際島嶼教育研究センター・准教授

氏名:山本宗立

授業科目名	太平洋島嶼学特論
研修先(国・地域) 滞在地	ミクロネシア連邦チューク州・グアム
研修期間	平成27年9月6日～9月12日
<p>〔研修の成果〕</p> <p>ミクロネシア連邦チューク州ウエノ島ではチューク州公衆衛生局の Angie William 氏にチューク州(鹿児島のように離島が点在している)における公衆衛生啓蒙の現状・課題について御講義いただくとともに、公衆衛生局を案内していただいた。地元の市場を訪れて地場産の作物や魚介類について学び、近代的な設備を持つスーパーマーケットでは多種多様な輸入食品が多量に販売されていることを確認し、MIRAB経済の構造を理解した。ピス島では、パンノキの倒木や枝葉がなくなっている様子、芋畑に海水が浸水したため新植した様子、パンノキ・芋類・バナナ等が被害を受けたため敷地内に新たにサツマイモやキャッサバ等の畑を作った様子など、2015年3月末にチューク州を襲った大型台風の影響を目の当たりにし、小さな島が災害に如何に脆弱かを学んだ。また、伝統的な食事(パンノキ、芋類、バナナ、ココヤシ、魚介類)を島人と共食するとともに、実際に魚介類の捕獲・採集を体験した。電気・ガス・水道のない小さな島で、半自給的生活を経験し、現代人が忘れかけている「生きるとは何か」について、再考・熟考する機会を得た。人が「豊かな」暮らしを持続的に実現するために必要な、自然生態的基盤、政治経済的基盤、社会文化的基盤について理解を深めた。</p> <p>グアム島の南部を半周し、グアムの自然(植物・動物・地形など)や歴史(特に第二次世界大戦時の遺跡や博物館において)を学んだ。大学間交流協定のあるグアム大学を訪れ、教育学部の Yukiko Inoue 先生にミクロネシア地域における教育・文化・社会・ジェンダーについて講義をおこなっていただき、3時間に亘り学生と活発な議論をしていただいた。また、ピス島出身で現在グアム島に住んでいる家族を訪れ、就労・教育機会等を求めてミクロネシア連邦からグアム島に移住した人々の生活を観察し、拡大家族の重要性を認識するとともに、MIRAB経済の構造を再度理解した。</p> <p>今年度の学生も非常に意欲的な学習姿勢であった。</p>	
<p>〔今後の課題〕</p> <p>学生の安全面・健康面に全く問題がなく、講義も円滑におこなうことができた。今年度で3年目の講義であるが、すべての学生が講義に満足し、来年度の講義を後輩に進めているようで、来年以降もこの講義を続けたいと考えている。今後の課題としては、受講人数が増えた時に、もう一人の引率教員を用意する必要があり、その予算をどうするか、である。</p>	

学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

所属 教育学研究科 1年

氏名: 濱島実樹

授業科目名	太平洋島嶼学特論
研修先(国・地域) 滞在地	ミクロネシア チューク・ウェノ島、ピス島 グアム
研修期間	2015年9月6日～2015年9月12日
<p>〔研修を通じて得た成果〕</p> <p>今回、この研修に参加して得た成果を大きく2つ述べたい。1つ目に、現地の人々と交流できたことである。特にピス島では2泊3日の滞在を経験し、現地の人々の生活ぶりを身近に感じることができた。例えば、ピス島における教育について目を向けると、学校はあるものの授業が行われるか否かは、教師の気分次第で決まるという状況だった。安定した教育制度がピス島で確立されるためには、より一層ミクロネシア政府や支援国の支援、教師の意識向上が求められると考えた。一方グアムでは、ピス島と縁のあるファミリーと交流することができた。ふるまわれた食事には特別な時に食べるという、「イヌの丸焼き」があり、ピス島におけるイヌを食べる食文化に触れることができた。このような研修でなければ、できない経験であっただろう。2つ目に、日本が与える影響をウェノ島・ピス島・グアムのそれぞれで感じる点ができた点である。ピス島の場合、詳しいことは分からないが、おそらく戦時中の日本における統治の影響で、「シャシン(写真)」「イド(井戸)」「ベンジョ(便所)」などの日本語が、日本語と同様の意味で使用されていた。ウェノ島では、日本からの輸入品がたくさん店頭に並んでいた。また、レストランのメニューにはお刺身や照り焼きバーガーもあり、決して日本とは無縁ではないことが判明した。現地の人々も「こんにちは」や「おはようございます」など日本語で話しかけてくれた。グアムでは、観光客の約8割が日本人ということで、グアムの観光を支えているのは日本人といっても過言ではない様子だった。異国の地でありながら、非常に日本と縁のある地であることが、研修を経て得た成果の一つであるといえよう。</p>	
<p>〔研修後の抱負〕</p> <p>研修の成果として日本との関係性をあげたが、ウェノ島・ピス島・グアム島(ピス島については推測)のそれぞれが、戦時中日本の統治下にあったことが共通していた。そこで気になるのが、韓国や中国のように日本による統治が影響して今も関係性が慎重な国があるなかで、いかにしてその関係性を改善してきたのかである。日本統治時代の状況から、関係改善をはかり、日本と今現在の関係性を図るに至るまで、どのような経緯があったのか。なぜ、ミクロネシア・グアムの人々は日本人に友好的なのか。今後の課題としていきたい。</p>	

(記入にあたっての注意) この報告書は今後の奨学金支給にあたっての参考となるものですので、詳細(複数頁可)に記載をお願いします。冊子として後に残るものなので記述の仕方にも注意して下さい。また、パソコンでの作成を原則とします。

学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

所 属:医歯学総合研究科・修士1年

氏 名:下敷領一平

授業科目名	太平洋島嶼学特論
研修先(国・地域) 滞在地	ミクロネシア連邦・グアム
研修期間	平成27年9月6日～9月12日
〔研修を通じて得た成果〕	
<p>私が今回の太平洋島嶼学特論の研修を通じて得た成果は、生の英語に触れる機会の大切さである。英語圏である国に滞在して、現地の方々と英語で会話をすることで、自分の英語能力の低さを痛感した。研究する上で、英語ができることはとても重要である。これから研究を進めていく上で、英語の論文を読むこともあれば、国際学会にて英語でプレゼンテーションをすることもあり、海外の研究者と会話する機会も多くなると思う。今回の研修で、生きた英語に触れることで、英語を用いて会話をしなければいけない機会がいくつかあった。思い通りに自分の意思を伝えることができなかつたので、今後さらに英語の勉強に励み、英語力のスキルアップを図りたい。</p> <p>また、今回の研修で、たくさんの自然と触れあうことができ、改めて、地球の尊さを肌で感じる事ができた。海の透き通るきれいさ、自然の食べ物の美味しさ、生きとし生ける物の雄大さに感動した。ミクロネシア連邦のピス島では、自給自足の生活がメインで、まさに今を生きる、目の前の人生を思い切り楽しんでいるように感じる事ができた。ピス島の人々と触れあうことで、生きることの幸せとは何かを再確認する事ができた。</p> <p>ミクロネシア連邦のチューク州にて、パブリックヘルスセンター(保健所)へ訪問する機会を頂いた。チューク州における公衆衛生の実態や疫学予防のために行っている活動について知ることができた。日本の医学での現状と比較することで、限られた資源の中での医療提供のあり方を考え直す必要性を感じた。</p>	
〔研修後の抱負〕	
<p>今後、ミクロネシアにおいて、疫学研究によるアプローチを行うことで、医とは何かを追究し、より深く学んでいけるよう、努力していきたい。現地のフィールドワークにおいて、英語でコミュニケーションできることが必須であるので、今以上にもっともっと英語に触れる機会に接して、英語の勉強に励んでいきたい。今回の研修で感じたことを、自分のフィールドに還元して、多くの仲間とシェアして、グローバルな研究に関わっていきたい。</p>	

(記入にあたっての注意) この報告書は今後の奨学金支給にあたっての参考となるものですので、詳細(複数頁可)に記載をお願いします。冊子として後に残るものなので記述の仕方にも注意して下さい。また、パソコンでの作成を原則とします。

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

所属: 教育学研究科 美術科教育 大学院 2 年

氏 名: 本坊真衣子

授業科目名	太平洋島嶼学特論
研修先(国・地域) 滞在地	ミクロネシア連邦チューク州、グアム(アメリカ合衆国) 1) チューク観光局、2) The Korea South Pacific Ocean Research Center、3) ウェノ島、 4) ピス島、5) トノアス島、6) Chuuk Women's Council、7) グアム大学
研修期間	平成 27 年 9 月 6 日 ~ 平成 27 年 9 月 12 日
<p>〔研修を通じて得た成果〕</p> <p>今回の研修で私は改めて教育の重要性を実感した。ピス島で小学校を訪問した際、平日にも関わらず授業が行われておらず学校には子どもたちの姿はなかった。理由はその日の朝激しい雨が降り教師が学校に行くことを拒否したからという冗談のような理由である。また教育格差が都市部と比べ歴然である事実と合わせて、ここピス島では児童がよりよい教育を受けるために親戚を頼って都市部(グアム等)に出て行っている。机等学校の備品や資材はある程度のものが準備されている様子だったが、学校職員の意識の低さから子どもたちから教育の機会を奪っている。本当に必要な支援は現地で学校を確実に運営できる職員を育てることであり、それは物資を支援することよりもはるかに難易度が高い。支援のあり方とはどうあるべきか、子どもたちのためになる教育とはどのようなものであるか今一度考える必要があると思った。帰国前グアムで実際にピス島を離れて学校に通っている子どもたちに話を聞く機会があった。彼らは口々にピス島を懐かしみ愛していることを話した。自分の生まれた島を離れて学校に通うしかない彼らの現状はがとて悲しく残念に思えてしかたがなかった。実際に機能していない学校現場を目の当たりにし、この現実に嘆く地域の人たちの声や島を離れることになった子どもたちから話を聞くことで、これまで以上に教育の重要性を意識し問題を可視化することができた。</p>	
<p>〔研修後の抱負〕</p> <p>今回の研修で経験した島での暮らし、自然の美しさを鹿児島の教育現場にアウトプットしていくとともに、鹿児島県における離島教育について理解を深めていきたい。鹿児島県は他県と比べ離島数が広範囲に点在し離島教育問題を切り離すことはできない。環境の差からくる教育の質の違いは仕方のない問題として片づけてしまうのではなく、これらの問題に私たちがどう向き合っていくかが重要である。今回の研修で学び感じたことを、子どもたちだけではなく教育現場に関わる人達とも共有し考える機会をもうけていきたい。生まれた場所や環境によって生まれる教育格差を少しでも改善できるよう働きかけをしていきたい。</p>	

学生海外研修報告書

鹿兒島大学長 殿

研修参加者

所属:(学部(研究科)・学年)

人文社会科学研究科・博士前期課程2年

氏名: 畑山 悠希

授業科目名	太平洋島嶼学特論
研修先(国・地域) 滞在地	ミクロネシア連邦・グアム
研修期間	平成27年9月6日～9月12日
<p>〔研修を通じて得た成果〕</p> <p>1. 国際支援のあり方について</p> <p>ミクロネシア連邦チューク州のピス島には、水道・ガス・電気が通っていない。上水道を整備するべく、ヨーロッパのある国の支援により島の1か所に大きなタンクが設置され、住居のそばまで配管がなされたが、現在は全く機能していない。島の人々にとって維持・修理が困難な装置であったためと聞いている。ピス島では腸チフスの保健指導が行われている(かといって、島の見識ある人物に腸チフスがどのような病気かを尋ねても答えられない)ことからわかるように、安全な水の確保は重要であるといえる。しかし、この支援が本当に必要であったのか、適切な段階をふんでなされたのかは甚だ疑問である。島の人々は海水と井戸水と雨水、煮沸した雨水を使い分けている。彼らは上水道の必要性を感じたのか、感じずともその重要性を理解したのか。また、現地の人々が必要性を感じずとも、外の人間の判断により健康面を含め損害を小さくするため、あるいは利益拡大のための支援を進めるべきであるのか。いずれにせよ、先進国によるパターンリズム的発想に基づく支援の危うさと再考の必要性を強く感じた。この気づきは、実際にピス島での国際支援の実情を垣間見たことで得られた成果だと考えている。</p> <p>2. 家族について</p> <p>日本で「婚外子」や「複雑な家族構成」と聞くと、一般的にネガティブなイメージが付きまとうと覚めるのは、わたしだけだろうか。ピス島の家庭は実に複雑な家族構成で、婚外子を母親でない女性が養子にとったり、親戚の子どもが家を転々と移り住んでいたりする。お世話になった Nereo 家の大きなお父さん(グアム在住)が「ピスの家には今、誰がいた？」と質問するほどだ。</p> <p>同一の母系集団(クラン)内での婚姻は伝統的に禁じられている。また婚姻は、日本のような法律婚(届出主義)ではなくキリスト教(カトリック)の教義に従い神に誓うものであり、その認識が大きく異なる。複雑な家族構成に湿っぽさは感じなかったし、それがそこでは普通なのだと理解するのに時間を要しなかった。</p> <p>驚くべきは、家庭内での規律である。男性は漁・ココナッツ捕りなどの家の外の仕事、女性は料理などの内の仕事をし、行動を共にしない。目上の者の前で煙草や檳榔を口にするのは控え、客人(今回の場合わたしたち)と食事を共にするのは家長のみ。女性は家族内とて肌の露出を極力おさえ、丈の長いスカートを着用する。子ども達はこれらの規律を自ずと理解していることに加え、とにかくしっかりしている！聞き分けが良く、わたしたちと同じ部屋に居て良い時かどうかを見極め、時に井戸水を汲んだり島を案内したり、思いやりをもって主体的に動いてくれた。自分が同年齢の頃を思い出し、日本の核家族で育った子どもだとうはいかないだろうと思った。</p> <p>人口減少にともない女性労働力の活用が急務とされている我が国の状況はピス島と真逆にあるといえる。しかし、結婚により自身のライフスタイルを制限されたくないカップルのいわゆる事実婚状態を社会制度的に容認することで柔軟な生き方を許容する社会づくりの議論が活発になされている今、一定の参考にはなると考える。また、両</p>	

親が働きに出ると子どもの面倒をみることができない、長幼の序や畏敬の念が身につかないといった核家族化による弊害を見つめ直し、拡大家族で生活していくことの再考の余地があると感じた。わたし自身の将来的な家族の理想とこれからの日本社会のあり方の両方につき深く考えを巡らすことができたのが、大きな成果であった。

3. 働くことについて

わたしは労働の持つ自己実現の側面に強い関心があり、この授業を通じて無選別に Do you enjoy to work? と質問することを決めていた。ミクロネシア連邦チューク州のメインの島であるウェノ島では、市場で惣菜を売る女性と、日用雑貨品店に勤務する女性に尋ねたところ、笑顔で Yes と即答。ところがその理由を尋ねると、答えに困っていた。前者は答えが出てこず、わたしが「お客さんとのコミュニケーションがおもしろいですか？」と聞くと、間を置いて Yes と答えた(誘導尋問をしてしまった)。後者は「お金を稼げるから」だと答えた。やや肩透かしをされた感じもしたが、その感覚は、日本で暮らすわたしが労働に抱いている理想のようなもののせいだとも思った。お金を稼げるから楽しい、それでいいのだ。

ピス島では、この質問ができなかった。半自給自足生活を目の当たりにし、これが work なのかという疑問にぶつかったからである。わたしの頭の中で work に使用者と被使用者の構図が前提となっていたがゆえの、限界であった。漁も家事も work には違いないのに。

グアムでは滞在先のホテルのゼネラルマネージャーから労務管理について話を聞き、Department Of Labor で労働事情を、Agency for Human Resources Development で求職者支援について伺った。ここで特筆すべきは、少なくともホテル業界において、労働契約時の賃金に当該労働者の経験が日本に比べて格段に考慮されることである。日本では採用の可否において経験は考慮されるものの、そこから先はフォーマット化された雇用契約・就業規則にあてはめられることが多い。また、労働組合が存在しないというのも信じがたかった。非移民の労働者に限られるが、調理師、大工、溶接工などの業種につき、全業種横断の最低賃金(8.25USドル/1時間)を上回る最低賃金が17の異なる額で設定されている。日本にも同様の仕組みとして都道府県別に業種を設定し、その都道府県の最低賃金を上回る「特定最低賃金」を設けることができるが、いくら組織率・加入率が低くなっているとはいえ、労働組合は存在し、機能している。グアムでは労働組合を結成して改善すべき処遇に対する不満が存在しないと言われたものの、そんなことが本当にあり得るのかという、解決すべき疑問を得た。

生々しくておもしろかったのは、これらの聞き取りのための移動中にタクシー運転手から聞いた話だ。この時、一人で行動することもあり、安全なタクシーを前述のゼネラルマネージャーに手配してもらったのだが、案の定、グアムのタクシーはぼったくりが横行しているとのことであった。そこには、グアムのタクシー業界における労働事情が関係している。たとえタクシー会社の運転手であっても independent な身分にあり、ガソリン代や保険料の負担を含めたタクシーの維持・管理費用は運転手持ちであり、おまけに固定給が存在しない完全歩合制であるという。日本人観光客の中でグアムのタクシーは危ないという認識が広がり、大手旅行会社のツアーバスに客をとられているとのこと。労働環境の不安定さがモラル低下を引きおこし、その業界全体の利益を損なうという負のスパイラルを知ることができた。

わたしは来春から労働基準行政に携わる。働くこととは単に使用者と労働者の関係にとどまらないという初歩的で極めて重要なことを改めて認識できたことは、かけがえのない成果であった。

〔研修後の抱負〕

この講義を通じて知り合った方々への感謝の気持ちを胸に交流を続け、良き友人たることが最も大切なことだと考える。日本に暮らしながらも、遠く海の向こうで笑い、食べ、働く人達のことを忘れず、時に心配し、心配されながら人対人のやりとりを続けることで、より真実に近い部分が見えてくると考える。

コミュニケーション力向上のため、多様な価値観の存在を受け入れ、相手の心に寄り添い、状況を弁えながら自分の意見を素直に伝える訓練が私には必要だ。英語うんぬんは二の次であると言っても過言ではない。これは日本での日々の生活で磨くことであるが、世界中のどの場所へ行き、どのような状況下にあっても、わたしという人間が他者と何かを交わす際に身についておくべき姿勢だと痛感した。